

地球規模保健課題解決推進のための研究事業（日米医学協力計画）  
「日米医学協力計画の若手・女性育成のための日米共同研究公募」  
事後評価 課題評価委員会における主な指摘事項

研究開発課題名	新型と推定されるボツリヌス毒素の神経毒素活性の解析 / Analysis of neurotoxicity of a putative novel botulinum neurotoxin
研究開発機関	金沢大学 医薬保健研究域医学系
研究開発代表者	藤永 由佳子
研究期間	令和2年9月15日から令和4年3月31日

○評価委員会コメント

強み：

- 日米の連携のもと、BoNT/X が神経毒素活性を示さない、もしくは非常に活性が低いことを証明できた事は、重要な知見と考えられる。
- 本研究についてはある程度結論が出たので、研究としては一段落といった印象もある。
- 研究成果の治療法への応用可能性の仮説を立て、共同研究体制を強化出来ると良いだろう。
- 当初計画していた成果は着実に得られた。得られた成果は、バイオテロ等に使用される可能性があるボツリヌス菌について重要な情報を与えるものであり、医療分野および社会的ニーズという点においても重要な成果である。日米の研究グループが相互補完的な研究データを出すことで、目的とされていた解析の結論を導き出した点は評価できる。今回の開発研究により日米の研究グループ間の連携が強まった。今後の病原性や治療法、応用の研究において、共同で研究を推進していくことが期待される。日米の研究者の連携という意味で、日米医学協力計画のための取組に資するものであったと言える。
- BoNT/X のさらなる毒素活性解析が待たれる。

弱み：

- BoNT/X が神経毒素活性を示さない、もしくは非常に活性が低いことを証明できたことは評価に値するが、本研究は、ここまででほぼ完結しており、BoNT/X の医薬品としての臨床応用の可能性は見込めないものとする。